「これで、最後の一体……か？」
　目の前のゾンビを斬り捨てた女騎士は、油断なく身構えながら周囲を確認した。
　ややあって、もはやあたりに動くものの気配がないことを確認すると、ようやく緊張を解いて、ふうっと溜息を吐く。
「……全滅、か……」
　それは敵だけでなく、味方も含めてということだ。
　死者の骸を操って生命を冒涜し、民心を誑かす悪しき死霊術師を討つべく教会から派遣されてきた聖堂騎士団のうちで、アンデッドの護衛どもと戦うためにこの部屋に留まった者は、自分以外すべて命を落としてしまった。
「すまない。先に神の御許で待っていてくれ。弔いは後で、必ずするから」
　仲間たちの骸と、自分が倒した屍たちに小さく印を切って短い祈りを捧げると、彼女は休む間もなく先を急ぐ。
　彼女はまだ若い女性であったが、神に仕える聖堂騎士だけあって、死者の腐汁がその端正な顔や美しい金の髪にかかって汚れているのを気にした様子もない。
　そんな些末なことを気にかけるのは、全てが終わってからのことだ。
　今は、不死者どもを統べる大元の死霊術師を討つべく、先に向かった仲間たちの安否が気がかりだった。
「みんなは、もう悪しき術師を仕留めただろうか」
　そんな希望的観測を口にしながら、病的な緑色をした魔法の灯りが照らす、カビと腐臭に満ちた死霊術師の穴蔵を駆けていく。
　幼いころから孤児として、共に教会で育てられてきた親しい仲間たち。
　その顔を思い浮かべ、彼ら彼女らの無事を神に祈りながら、彼女は進んでいった。

「う……、うぅっ……！」
　やがて、大きなホールのようになった場所に出ると、女騎士は思わず口元を抑え、悲痛な呻きを漏らした。
　そこには、これまで以上に濃密な死臭が漂っていた。
　先行した仲間たちは全員無惨な屍となって、いくつものアンデッドの残骸らしきものと共に、あちこちに転がっている。
　そして、ホールの奥には黒いローブを身にまとい、先端に髑髏のついた杖を持った男が、悠然と佇んでいた。

　まるで水死体のように膨れ上がったおぞましい青白い体、あれが件の死霊術師なのか。
　その姿を認めた瞬間に、彼女の頭の中は赤いもので埋め尽くされた。
「貴様ァァ！！」
　激昂して剣を構え、後先も考えずに正面から突進していく。
　死霊術師はそんな彼女を冷たい目で一瞥すると、悠然と呪文を唱え始めた。
「ザジデ・ガヌ・デネブ……」
　アンデッドどもの腐汁に塗れた銀剣が彼の喉元に迫ろうとした瞬間に、その呪文は完成した。
「……バイディング・タイト」
「……！」
　途端に、女騎士の意識の全てが固まった。
　彼女の視界はかすみ、色彩が消え、灰色になっていった。
　全ての感覚が無くなっていく。
（神よ、私は死んだのか）
　床に倒れ込む直前に、彼女はそう思った。
　その思いさえもすぐに消え去って、意識も視界もすべて、完全な暗闇に飲まれた――。

◆

「目覚めよ」
「ーー……ん、ぅ……」
　リアナがその声に応えてゆっくりと目を開けたとき、目の前には一人の男が立っていた。
　彼がボガートという名の死霊術師であること、そして、今の自分が全裸で、血とカビの臭いが充満した薄暗い場所で寝台に横たわっていることに、彼女は気がついた。
「……」
　そう、ただ気がついただけだ。
　リアナはただ、ぼうっとした目で彼の方を見つめ続ける。
　自分の裸身を隠そうともせず、またその他のどんな行動も、起こそうとはしな

かった。
「我が問いを聞き、それに答えよ」
　ボガートが低い声で、そう命じる。
「……わかるな？」
「わかった。言ってくれ」
　リアナはそう言うと、じっと彼の声に注意を傾けた。
「まず、自分の名を。そして自分が何者かを覚えているなら、言うのだ」
「私はリアナ。聖アリアンナ教会の聖堂騎士だ」
「よし。では次に、私が誰かわかるなら、言え」
「お前はボガート。ゲドゥの穴蔵の死霊術師だ」
「お前の身に起きたことを、覚えている限り話してみよ」
　リアナはじっと記憶を辿って、答えていった。
「……私は、教会で大司教様から、邪悪な死霊術師の討伐命令を受けた。聖堂騎士の仲間たちとともに、ゲドゥの穴蔵に向かい、お前と戦った。仲間たちはみな、お前の死霊術と、下僕のアンデッドにやられた。私は激高して、お前に斬り掛かって……」
　そこまで言ったところで、リアナは一度言葉を切り、考え込んだ。
「どうした。そのあとは？」
「……わからない。お前がなにか、呪文を唱えたと思った。そこで意識が途切れて、あとは覚えていない」
　ボガートはそれを聞いて、満足気に頷いた。
「ならば結構。記憶は完全に残っているようだな」
　それから出し抜けに、リアナの形の良い、誰も触れさせたことのないであろう瑞々しい乳房に手を伸ばし、こねくり回す。
「……」
　リアナはそれに対して、抵抗もせず、なんの反応も示さなかった。
「では、その後に何があったか教えてやろう。まず、お前はあのとき、わしの唱えた《死の呪文（デス・スペル）》によって死んだのだ」
「死んだ？ 」
「そうだ。だが、わしが死んだお前を、再び甦らせたのだ。死霊術の奥義によってな」
　それを聞いて、リアナは、ああ、なるほどと思った。